

# 西田哲学会 第 21 回年次大会 2023 年 7 月 22 日・23 日

Kozyra Agnieszka (コズィラ・アグネシカ) (University of Warsaw)

## 西田幾多郎の絶対矛盾的自己同一の論理と

### パーシー・W・ブリッジマンの操作主義の理論

#### 研究発表概要

京都学派の創始者である西田幾多郎（1870-1945）は、禅宗の影響も受けた絶対無の哲学（絶対矛盾的自己同一の哲学）は、一種の神秘主義ではないと強調した。彼の最後の未完成のエッセイ『私の論理について』（1945年）で、彼は絶対矛盾する自己同一の論理が学界に理解されておらず、その意味が歪められていると不満を漏らした。西田が宗教的直感を究極の哲学的視点で混乱させたという田辺元（1885-1962）の批判に対する西田の唯一の防衛線は、「絶対的な無」の哲学と科学哲学、主に現代物理との関係を示すことによって「心」と「論理」の概念を再定義しようとするのであった。西田は特に量子力学とアインシュタインの相対性理論に興味を持ち、現代物理学に関する多くのエッセイを執筆したが、その中で最も重要なのは「経験科学」（1939年、私がポーランド語に翻訳したもので、クシシュトフ・ステファンスキー物理学教授のコメント付き）である。私のプレゼンテーションの目的は、パーシー W.ブリッジマン（1882-1961年、1946年にノーベル物理学賞を受賞）によって発展させた操作主義の理論を、西田がどのように絶対無の哲学に組み込んで、現実の原理でもある古典論理の妥当性を損なおうとしたか、ということである。私の意見では西田が現代物理学を論じる時も「選択的同一化」（selective identification）の方法を適用して、つまり絶対矛盾的自己同一としての現実観に適合する要素のみを選択し、不適切な要素を無視していた、と考える。西田の理論は、禅仏教の伝統と現代の物理学を結び付けようとする点で、注目に値するものであろう。

Agnieszka Kozyra, 「パラドックス的ニヒリズム — 西田ハイデッガー」『日本研究』33号、2006、国際日本文化研究センター、93-149頁。

Agnieszka Kozyra, “Nishida Kitarō’s Philosophy of Absolute Nothingness (Zettaimu no tetsugaku) and Modern Theoretical Physics”, “Philosophy East and West” vol.68, No.2, Hawaii University Press, April 2018 pp. 73-85.